



## 映画雑感12

柴生田 晴四

(経済倶楽部理事長)

▼コロナ禍のお陰で映画館に足を運んで映画を鑑賞する楽しみを奪われてしまいました。

今回は二か月余りの空白を挟んで、昨年末から今年前半の邦画から。

▼まず昨年公開の「いのちスケッチ」。地方都市の小さな動物園を舞台に、漫画家になる夢をあきらめて帰郷して見習い飼育員として雇われた青年が慣れない仕事に悪戦苦闘しながらも、福祉動物園という理想に共感して、特

技である漫画の技を仕事に生かすことで職場に居場所を見つけていきます。

▼「カツベン」は無声映画時代に活動弁士を志す青年を主人公に周防正行監督が描くコメディ。下積みの中で実力を蓄え、逆境に立ち向かう青年を映画初主演の成田凌が好演。見事な語り口で観客を魅了します。

▼「男はつらいよ お帰り寅さん」は二二年ぶりに制作されたシリーズ50周年記念作品。今は亡き渥美清が名台詞とともにスクリーンに蘇ります。シリーズ後半に実質的な主役を務めた吉岡秀隆演じる満男と、後藤久美子扮する元恋人イズミの再会と別れが描かれます。内容もさることながら往時の雰囲気違和感なく再現した山田洋次監督の手腕はさすがです。

▼ドキエムメンタリー「尾崎豊を探して」は400時間に及ぶライブ映像やプライベート映像を再構成することで、伝説のシンガーソングライターの真実に迫ります。まっすぐに、

そしてひたむきに音楽と向き合い続けたその姿は彼の魅力を再認識させてくれます。

▼岩井俊二監督の「ラストレター」は、行き違いから姉のふりをして初恋の相手と文通をする妹の物語を軸に、現在と過去が交錯する中で失われてしまった青春の輝きと残された現実の再生が描かれます。

▼「記憶屋 あなたを忘れない」は、日本ホラー小説大賞読者賞受賞作の映画化。映画として要領よくまとめられている反面、大団円にいたるホラー的風味やヒロインと死後の自

らの存在を消そうとする弁護士士の哀しみが生む感興が多少損なわれた感は否めません。

▼「AI崩壊」は人間の幸福に資する筈だったAIが突如暴走を始め、人間の選別と抹殺を行う怪物に変身する恐怖を描いた近未来映画。現代的テーマをうまく使って権力の陰謀の怖さを描き、久しぶりに映画に復帰した大沢たかおが最後まで映画を牽引します。

▼3月に見そびれたまま上映自粛明けの6月にやっと出会えたのが「弥生、三月」。卒業間際に友人を失った男女が、お互いへの思いを秘めたまま、三十年後に新たな一歩を踏み出します。まっすぐな生き方を貫くヒロインを演じた波留がはまり役。理不尽な社会への怒りが散りばめられた辛口の恋愛映画でした。